

# AMDA発足25年

1984年の発足から今年で25年を迎えるAMDA。四半世紀の歴史を重ねる間、岡山で医学生が集まりから始まったAMDグループの菅波茂代表に聞いた。【石戸諭】

## 菅波グループ代表に聞く

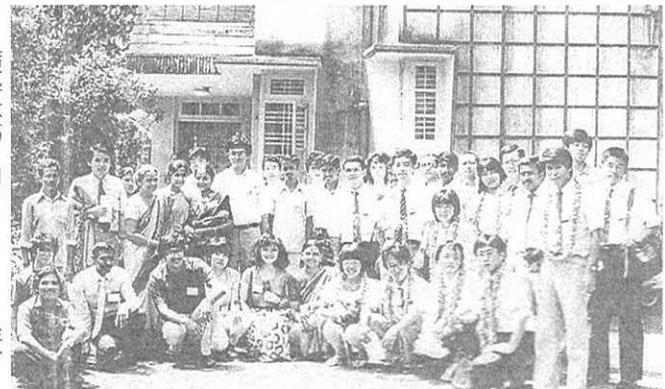
□25年の歴史□

始めた時は「何かをやりたい、人の役に立ちたい」という気持ちだけでいい。現場での活動を踏まえながら、多くの考え方を積み重ねてきた結果が今のAMDAです。私たちが絶えず発信していること、例えば「相互扶助」や「援助を受ける側にもプライドがある」といったキーワードはすべて現場での活動から得られたものです。

相互扶助は95年のサハリン大地震で実感しました。あのとき私たちは、援助をロシア側に拒否された。しかし、「神戸の震災の時に助けてくれた。何かお返しをしたい」と言ったら受け入れてくれた。すなわち、困った時は「私は今、あなたを助けますが、将来私が困ったら助けてほしい」という精神が、世界に通用する可能性があると思っただけです。チャリティー精神だけではなく、施す援助ではなく、パートナーとして相手のプライドを尊重すること。そうしたAMDAの原則を、支援を通じて積み重ねることができた。現場には普遍性があります。

□次のステップ□  
まず、「ネパール子ども病院プロジェクト」を拡大します。コンセプトは「平和と幸福」です。人々に幸福を実感してもらえようように、医療や教育にアクセスしやすい環境を整えたいと思つて、もう一つ大きな目標があります。それは「sogofujio（相互扶助）」という言葉をもっと普及させ、国際社会で共有できる価値観に高めることです。わかりやすく言えば、英語の辞書に単語として載せられたらいい。実現すればそこがAMD

点だと思つています。Aの文化的使命の到達



結成直後のAMDA1984年  
インタビュー (AMDA提供)

## 30の国・地域にネットワーク

AMD Aの原点は79年までさかのぼる。設立時の名称は「The Association of Medical Doctors of Asia (=アジア医師連絡協議会)」。79年、国際問題となっていたカンボジア難民救援のため、医学部生と菅波茂代表が現地に飛んだ。しかし、難民キャンプの位置も分からず、活動の受け入れもままならない。善意だけでは何もできない。ネットワークの重要性を学ぶところからAMD Aは始まった。

AMD Aの拠点は現在30の国・地域に及ぶ海外ネットワークにある。共有するのは「現地を信頼する=ローカルイニシアチブ」という考え方だ。災害発生時の救援・復旧態勢作りは現

歴史と組織 現地信頼する大切さ知る  
が主導し、日本本部や他の海外支部が必要に応じて援助する。  
「文化、宗教、歴史が異なる共同体で活動する際に重要なのは、信頼できる人に現場を任せること」と菅波代表は話す。08年のミャンマー・サイクロン被災と中国・四川省大地震。ミャンマーでは現地支部を中核に日本から救援チームを派遣、四川では台湾支部を中心に対応した。世界的なネットワークを生かした迅速な援助が可能になりつつある。  
菅波代表は「ある共同体がどんな原理原則に基づいて動いているかを理解しないと、不信感から排斥につながりやすい。自他の違いを不幸ではなく、財産にすることが肝要」という。

# 相互扶助の精神を世界に

08年5月、サイクロン「ナルギス」の直撃被害を受けたミャンマーで、AMDAは発生当初からミャンマー人スタッフの医師らが現地の保健当局と連携し、巡回診療を開始した。6月10日、16日には、人道支援の受け入れに慎重だった軍事政権下ながら、日本人医師ら5人も派遣した。

ヤンゴンの南約70キロのクンジャヤンゴン市での巡回診療では、ポー

ミャンマー・サイクロン被災者の診療にあたるAMDAスタッフ=AMDA提供



## 「政治的対立と支援は別」

トで移動しながら6000人を超える患者を診察した。海外からの支援受け入れに消極的な軍事政権に対する国際的な批判が強まる中、「全面的に受け入れることが正しいわけではない。政治的な対立と災害支援は別物だ」（菅波代表）と「AMDA流」の国際貢献論を実践した。

11月に来日したミャンマー保健省のバイン・ソウ副大臣は、AMDA本部(岡山市)を訪問し、「今後も災害が発生した場合は共に協力したい」と謝辞を述べた。

日本からは、二つの条件を満たす岡山大学の汪達紘医師や現地の調整にあたるスタッフが派遣された。結果的にA

MDAとして20人を超える医師、看護師が現

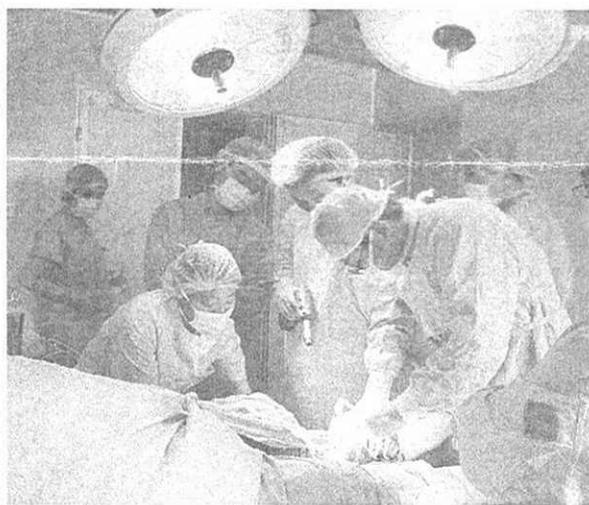
在が大きかったと言え

## 現場から得られた原則



インタビューに答えるAMDAグループ代表・菅波茂さん=岡山市内で

## 96年の雲南省などの経験生かし スムーズな援助態勢確立 医師免許など条件クリア



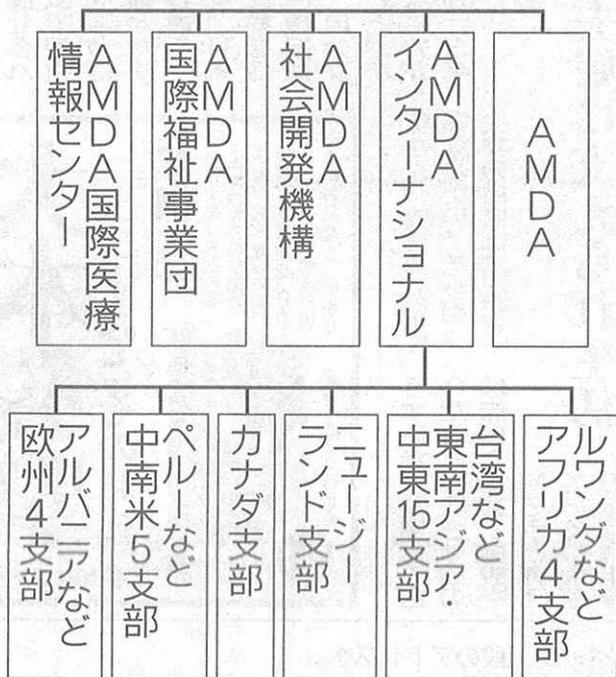
中国・四川大地震で行われた緊急医療救援  
AMD A提供

地入り。外科手術などもこなした。  
また、震災後の精神的な不安を持つ患者も多く、カウンセリングなども行った。中国に限らないが、スムーズな支援態勢の連携は、過去の支援活動を生かしたネットワークの存在が大きかったと言え

## AMDA25年の歴史

- 84年8月 AMDA設立
- 91年4月 クルド湾岸戦争被災民救援  
AMDA国際医療情報センター活動開始
- 92年1月 フィリピン・ピナツボ火山噴火被災民救援
- 93年1月 ソマリア難民緊急救援医療
- 12月 AMDA国際医療情報センター関西開設
- 94年4月 AMDA東京オフィス開設
- 95年1月 阪神大震災緊急救援
- 6月 国連NGO認定(カテゴリーII)
- 9月 第2回国連フトロス・ガリ賞受賞
- 96年4月 レバノン被災民緊急救援
- 97年1月 福井県三国町タンカー重油流出事故救援
- 8月 AMDA国際ボランティア研修センター開所
- 98年8月 パプアニューギニア津波緊急救援
- 11月 ネパール子ども病院開院  
ミャンマー子ども病院プロジェクト開始
- 99年4月 コソボ難民支援緊急救援
- 8月 トルコ西部大地震緊急救援
- 00年9月 モザンビーク大洪水緊急救援
- 01年4月 AMDA国際医療情報センターが内閣府より特定  
非営利活動法人の認証を受ける  
8月 菅波理事長が三木記念賞(国際親善部門)受賞  
9月 米国同時多発テロ被害への緊急医療支援  
02年7月 アフガニスタン支援活動
- 03年6月 アルジェリア地震被害緊急救援  
イラク復興支援  
SARS対策支援  
12月 イラン南東部大地震緊急救援
- 04年11月 新潟県中越地震支援
- 12月 環インド洋(スマトラ島沖)地震・津波緊急救援
- 05年9月 ハリケーン「カトリーナ」被害緊急救援
- 10月 パキスタン北部地震緊急支援
- 06年7月 国連経済社会理事会「総合協議資格」取得
- 07年3月 能登半島地震支援
- 8月 ペルー沖地震緊急医療支援
- 11月 グン平和賞受賞  
ガンジー人道支援賞07受賞
- 08年5月 ミャンマー・サイクロン被害緊急支援  
中国四川省地震被害緊急医療支援

## AMDAグループ組織図



# 外国人、へき地へ 羽ばたく支援



## 赤ちゃん550人超

「ひとつ、過疎地にも手を差し伸べてもらえんじやろか」——。旧哲多町(現新見市)の町長、竹元武士さん(70)の求めで市内唯一の出産施設「国際貢献大学校メディカルクリニック」(同市哲多町)が設立されたのは03年9月。5年間で新しく生まれた命は550人を超えた。

### 国際貢献大メディカルクリニック(新見)

校営管理者でAMDA副理事長の的野秀利さん(41)によると、大学校誘致に乗り出した3市2町のうち哲多町の条件が最も厳しかったが「ローカルで不便。AMDAが支援に訪れる地域に一番似ているため選んだ」という。元町長の竹元さんは、「医師集団のAMDA関連の施設ができれば、医師派遣も——という考えがあったのも確か。それでも今、新見に安心して出産できる施設があることは誇り」と胸を張る。

クリニックは「地域づくりと国際貢献」を掲げ、01年に設置された研修施設「公設国際貢献大学校」(同)の関連施設。年間約130人の出産を扱う。市内はむろん、県境の広島、鳥取からも妊産婦が訪れる。同クリニックで出産した新見市上熊谷の主婦、前本こずえさん(27)は「(産科のある)高梁市までは1時間かかっていたが、30分になり、安心できました」と話す。同クリニックの河相淳一郎院長(59)は「『この地域の医療を支える』という意志が原動力です。診察を通じた人間関係も大切にしたい」と強調する。

さらに、隣接する介護老人保健施設も含め、働く人の99%は地元住民だ。医療・福祉サービスの提供と同時に、地元の重要な雇用の場もある。的野さんは「我々はプログラムを持ち込んだだけですが、地域づくりのモデル事業としては成功。地産地消・自己完結型のへき地医療の実践は、海外支援でのモデルケースに結び付く」と話す。地域医療と国際貢献、根底にある考え方は共通している。

AMDAの活動は国境を越えた災害地への医療支援だけではなく、へき地医療への対応や増加する外国人への医療支援などの役割も担っている。二つの現場から報告する。【石戸諭・石川勝義】

### 小林国際クリニック(神奈川)

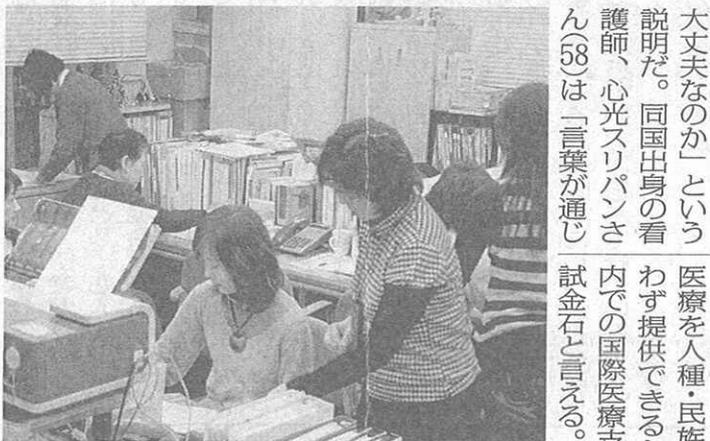
## 通訳付けて診察

神奈川県大和市にある「小林国際クリニック」。AMDA神奈川支部代表で院長の小林米幸さんが「開業医にもできる国際貢献を」と90年に開院した。以来、延べ約4万4000人の外国人患者を診察。1日30人を超える日もある。

取材当日の朝、市内に住むフィリピン出身の豊田ロサリオさん(45)が、長女のクレアちゃん(8)を連れてインフルエンザの予防接種に訪れた。滞日15年超というロサリオさんは日本語も達者だが、「病院での言葉は全く別」と話す。専門的な説明は、クリニックの通訳、石間フオルデリサさん(46)がタガログ語で伝えた。石間さん



通訳の女性(中央)が予防接種の内容などを説明する—神奈川県大和市の小林国際クリニックで



AMDA国際医療情報センターには外国人からの電話が相次ぐ

らによると、日本語に不自由しない外国人でも「病院では症状を伝えられない。医師の言葉が難しく何と言っているのか分からない」という。クリニックは7カ国語に対応しており、小林さんは「外国人という理由で受けられないサービスはない。日本が排他的なのではなく、準備不足なだけ」と指摘する。例えば、「大病院は案内がなくても分かる。でも小さな診療所は?」検診などの広報も一緒。多言語で翻訳すればいいだけののに「小林さんが発起人である理事長を務める東京・新宿のAMDA国際医療情報センターには、薬や医療制度、通訳の

依頼まで幅広い相談が寄せられる。タイ料理店を営むタイ人女性(51)は「病院で分かるのは『大丈夫』『また来週』だけだったこともある」と話す。女性「が知りたいのは『なぜ大丈夫なのか』という説明だ。同国出身の看護師、心光スリパンさん(58)は「言葉が通じない、お金がないなどの理由で病院から遠ざかり、手遅れになるケースもある」という。「大事なのは地域全体で受け入れるという姿勢ではないか(小林さん)。患者が納得する医療を人種・民族を問わず提供できるか。国内での国際医療支援の試金石と言える。」